

ぜいたくな悩み

札幌市立向陵中学校 一年 堀山 直浩

はっきり言って、僕の家は学校から近い。それを聞いた人は、まず間違いなくこう言う。

「いいなあ。うらやましいなあ」

百人いたら九十人以上は確実に言うだろう。残りの十人のうちでも、負けおしみで、「へえ、でも歩かないから足が弱りそう」

だとか

「学校と家のオンオフがつけにくくない？」

などと大人びたことを言ってくる友人もいる。

はっきり言って、僕自身は残り十人のうちの一人に入る。「へ？何？」と言われるのは承知の上である。「ないものねだり」と言われれば確かにそうなのだろう……。だが、僕の本心は、偽れない。

中学生たるもの、やっとランドセルから解放されたが未知のウイルス騒動で（今も決して油断はできないが）入学式後、すぐに休校措置がとられた。このため、僕らは友人達にも会えず……というより中学に入学したばかりの僕は新しい友達すら作れずに、オンラインの映像や、出された課題に黙々と取り組むしかなかった。日本中の、いや、世界中の生徒が、孤独と闘う数ヶ月を過ごした。

午前中授業や、学級、学年ごとの時差登校、一日おき登校など段階を経て、やっと学校生活が日常を取り戻していった。

はっきり言って、皆一人残らず、会話に飢えていた。休み時間、昼休けい、放課後など貴重な会話の時間を僕らは寸暇を惜しんで、しゃべる。友達と話すと『ああ幸せだな、オレ』と感ずる。そうした幸福感は人を無敵にする。雨にも負けず、風にも負けず、夏の暑さにも負けず、マスク着用による相手の声の聞きとりにくさにも負けず、僕らはしゃべり続ける。朝はテンションが低くても、だんだんエンジンがかかっていく。帰り道にはエンジンMAX状態である。その日一日あったことを友人達と楽しく話しながら帰る道中は、最高だ。このあと家に帰るといふ、謎の高揚感もあつてかみんな絶好調にしゃべりつくす。次に話せるのは翌朝なのだ。今日のこの話し

たい熱量は翌朝までの持続性を持っていない。だから、「鉄は熱いうちに打て」とばかりに皆、必死でその日の内に話すのだ。楽しかったこと悲しかったこと。怒ったこと嬉しかったこと。全部、全部ひっくるめて。

はっきり言って、距離が足りない帰り道。

はっきり言って、時間が足りない帰り道。

僕の苦悩は、僕の家が学校の至近距離にあることに始まり、そこに尽きる。

「学校に近い家を探したから、雪がひどい日も安心でしょ。いい場所でもよかったね。」父よ母よ、そう言ってドヤ顔するのはやめてくれ。僕は青春の一ページいや数十ページ分位、家と学校の近さによって失っているのだ。

「まっすぐ帰れよ。寄り道するなよ。」先生が皆に呼びかける声をバックに、僕は…僕は…自分の目の前に続く短すぎる「道」をにらみつける。

はっきり言って、真っすぐしか帰れないよ。

はっきり言って、寄り道のしようがないよ。

これが僕の帰りの「道」。

現場からは以上です。